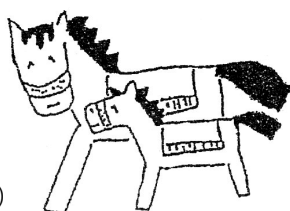


お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポッキリ、ポッキリと

21年 11月 NO. 180



(厚生労働省・高松市委託事業)

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

～どなたでも～

## 11月の主な活動

～お気軽にどうぞ～

11月 7日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。
11月 7日	土	実用筆書き講座 14:00～16:00	初めて筆書きする方 大歓迎!
11月 13日	金	おはなしの会 10:30～11:30	季節を感じるおはなしが いっぱいです。
11月 21日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て体験に おいで下さい。
11月 25日	水	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	元教師 十河先生に教員時代の よもやま話をお聞きます。
11月 27日	金	健康・育児相談 11:00～12:00	小児科園医師にゆっくり 相談できます。(予約要)
11月 28日	土	木工教室 14:00～16:00	木製品の修繕なども できます。

・毎火曜日 園庭開放(13時～16時)  
・上記の活動日以外は13時～18時まで地域開放します  
ので、親子でご来園下さい。  
(但し、月・日曜・祭日は休み)

**育児相談(月～土) 9:00～18:00**  
しつけや子育てについての悩み、  
保育園生活、入園・見学について  
の相談もどうぞ。

お天気、お天気、  
啼け啼けもずきち、  
底なしお空で。

続くよ、続くよ、  
むこうの街道を  
稲積んだ車が。

刈田の刈稲、  
榎の掛稲。

お天気、お天気  
川辺の梢で、  
もずきち高啼く。

秋日和



# さとうきび畑

作詞・作曲 寺島 尚彦

ざわわ ざわわ ざわわ  
↓ 広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
今日も見渡すかぎりに  
みどりの波がうねる  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
↓ 広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
風の音にとぎれて消える  
母の子守の歌  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
↓ けれどさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
今日も見渡すかぎりに  
みどりの波がうねる  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
昔海のむこうから  
いくさがやってきた  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
知らないはずの父の手に  
だかれた夢を見た  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
忘れられない悲しみが  
ざわわ ざわわ ざわわ  
波のように押しよせる  
風よ悲しみの歌を  
海に返してほしい  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
あの日鉄の雨にうたれ  
父は死んでいった  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
父の声をさがしながら  
たどる畑の道  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
風に涙はかわいても  
ざわわ ざわわ ざわわ  
この悲しみは消えない

ざわわ ざわわ ざわわ  
広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
そしてわたしの生まれた日に  
いくさの終わりがきた  
夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ  
広いさとうきび畑は  
ざわわ ざわわ ざわわ  
風が通りぬけるだけ  
お父さんて呼んでみたい  
お父さんどこにいるの  
このままみどりの波に  
おぼれてしまいそう  
夏の陽ざしのなかで



私が時々聞きたくなる唄に「さとうきび畑」という曲があります。私にとってこの曲は、心のどこかにいつも残っていて、時々フツと曲と歌詞がうかんでくるので、何か特別なものを感じます。

99歳で亡くなった父が戦後、捕虜として数年暮らした石垣島の話や米軍上陸により沖縄島民の4分の1にあたる尊い命が失われた悲しい出来事とが重なり合って、この曲を聞くと心を揺り動かされ、その後鎮魂の歌として心に深くしみ込んでいきます。

この度この曲を作詞、作曲された今は亡き寺島尚彦氏の「ざわわ さとうきび畑」という著書（琉球新報社発行）を朝日新聞社からいただきましたので、すこしご紹介しましょう。（堀）



### さとうきび畑の30年

（寺島尚彦著「ざわわ、さとうきび畑より」）

私がはじめて沖縄を訪れたのは、日本復帰前で米軍の統治下にあった昭和39年6月であった。さまざまな戦跡を歩いた末、日本軍最後の激戦地を覆っている一面のさとうきび畑に出逢った。その中を歩くと私の背より高いさとうきびが一斉に風をはらんで私を包みこんでしまう音に思わず足が竦（すく）んでしまった。その音の中に、そこの地下に眠る人たちの魂や怒号や嗚咽（おえつ）が聞こえてきたような気がしたのだ。空は青く澄み夏の太陽が燃え盛っていた筈なのに、私の回りはとても暗く感じた。

この思いを歌に、と私の心はかき立てられたのだが、あの風の音を表す言葉がどうしても見当たらない。「さわさわ」というのでは綺麗すぎるし、「ざわざわ」では騒然としている。こうして『ざわわ』が生まれるまでに1年半もかかってしまった。私はこの『ざわわ』を66回使い、11コーラス半、約9分かかる歌「さとうきび畑」を書きあげた。戦争を知らない人たちにも戦争の悲惨さを静かに淡々と心の奥深く伝えるために、この歌はこれだけの長さを必要としたのである。発表以来、多くの歌手によってこの歌は『ざわわ』の歌として全国に浸透していった。うれしい限りであった。

30年過ぎた昨年6月、NHKBSが制作した終戦50年記念番組「さとうきび畑——ある沖縄の鎮魂歌」のリポーターとして、私は再び沖縄を訪れることになった。かねてからこの歌が沖縄でどんな歩き方をしているのか知りたかったし、なによりももう一度あのさとうきび畑を歩いてみたかった私にとって願ってもない機会であった。

リゾートホテルのラウンジで毎日必ず一度はこの歌を歌うという若者。この歌を基に創作劇の練習をしていた小学校の演劇サークル。修学旅行の高校生にこの歌を一心不乱に聴かせている戦跡めぐりのバスの平和ガイド……。私はこの歌とそれぞれ感動的に出逢っていた。でもあのさとうきび畑は一体どこへ行ってしまったのだろうか。

取材最後の日、平和の礎（いしじ）完成記念式典を訪れた私に突然甦るある記憶があった。摩文仁（まぶに）の丘に繋がるこの広い一帯は、まさにあの場所に違いないと。緑の波は無いけれど海に面した断崖から吹きつける風の中に紛れもなくあの日の響きがした！けれどもこの墓碑銘の列はなんだろう。これで戦争の悲惨さは伝えられるのか。そういう想いを昇華し美化してはいないか。野菊の花1輪だけでも捧げたい人のためには、あまりにも立派すぎる！

今も沖縄は悩み続けている。あれだけの砲火を浴びた小さな島を実弾演習でどこまで傷つけようというのか。戦後50年を1つの区切りにしようという風潮の中で、沖縄の戦後50年は、戦後51年の単なる1つ前の年でしかなかった。沖縄の我慢は我々皆が共有すべきだと私は思う。

（「ひかりの子」1996年11月1日号）

## ちひろの「さとうきび畑」

11月30日早朝、新宿発の特急に乗った私は久しぶりに信州に向かう。雨上りの甲州路は照ったり霧に包まれたり繰り返して、珍しい朝の虹が山肌に橋を架けて車窓を楽しませてくれた。翌日から冬季休館になる安曇野（あづみの）ちひろ美術館を、私をはじめて訪れた。

この夏、その美術館長で、いわさきちひろの長男松本猛氏から1冊の絵本が届いた。「母が最後に完成させた絵本『戦火のなかの子どもたち』を描いていたとき、『さとうきび畑』をよく口ずさんでいました。母自身が体験した東京の空襲とベトナム戦争が重なり、あの絵本を描かずにはいられなかったのだと思います。母はあの絵本の中に『さとうきび畑』と一緒に描きこんだのでないかと思うほどです。そしてさらに「日本人でもこういう曲を作れる人がいるのね・・・母はこう云っていました」とも。添えられていた手紙はとても感動的だった。その絵本に描かれた子どもたちの目の奥には、戦争にまみれた悲しさと空しさが見えて胸が苦しくなった。

ちひろが希（ねが）っていたベトナム戦争の終結は、彼女がこの世を去った後であった。しかもその終結は湾岸戦争も含め大きな悔恨を残している。テロの暴挙は勿論絶対に許せないが、今回の報復戦争はどんな結末をたどるのか、憂うばかりである。ちひろが師事した画家丸木俊、影響を受けたケー・コルビッツなどの名をみながら、私の想いは佐喜眞美術館とも繋がる。戦争の悲劇から偉大な絵画が生まれるという因果関係から人間は解放されることは出来ないのか、永久に。

美術館を出るとき渡された1枚の紙。ラジオを聴きながら『さとうきび畑』の歌詩を書きとり清書した、ちひろの自筆のコピーであった。温かい文字が紙面いっぱい並んでいて、なにか宝物を頂戴したような気がしている。帰途、暮れなずむ北の空を雪雲がひしひしと覆いはじめるのを、ローカル線の小さな駅のホームで、私は心地よく眺めていた。

（「落ち葉」2001年2月7日）

